

図書館だより ～ 今月のおすすめ本 ～



『ファッションフード、あります。一はやりの食べ物クロニクル 1970 - 2010』 畑中三恵子

チーズケーキ、ティラミス、B級グルメ…。戦後の日本人はいかに食を楽しみ、果ては消費するようになったのか？ 激しくはやりすたりを繰り返す食べ物から見た日本文化史。 (西)



日本全国地図の謎

浅井 建爾

県境に建つ神社はどうなっているのか？ なぜ東日本の県は面積が広く、西日本の県は狭いのか？ 富士山の一合目、二合目などの「合」とは？ など、地図に秘められたさまざまな謎を取り上げ、分かりやすく解説。 (東)

▶詳しくは、東図書館 (☎ 62・0190) 西図書館 (☎ 75・5406) へ。



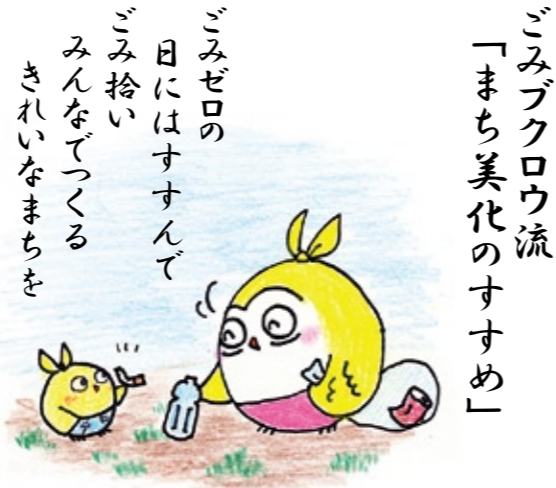
ドクターTのひとりごと

その⑪ 観光振興による 活力あるまちづくり

わが国では少子高齢化と人口減少が進行しており、特に地方において、過疎化が深刻な課題となっている。こうした社会構造の変化の中で、地域の活性化を図るには、市外から多くの人が入り、まちが元気になる仕掛けが必要となる。まさに着地型観光は、この課題解決に最も有効な手段であり、交通・宿泊業などととどまらず幅広い産業に影響し、新たな産業・雇用が生まれる。観光振興には、「地域の魅力を高める」ことが必要であり、まずは、住民自身が地域の豊かな観光資源を再認識できるような環境を整備し、「おもてなしの心」を大切に、来客者に「おもいで」を持ち帰っていただくことが重要である。現在、活躍されているボランティア団体のご協力を得て、「観光ナビゲーター」のさらなる育成も求められる。「おもいで」づくりとして、舞鶴独自の「おみやげ」も役立つと思われ、民間事業者にも協力をお願いしたい。今年、京都府より府北部の観光振興に向けた「海の京都」構想が発表され、近隣市町と緊密な連携が進められている。府・市民、民間事業者、観光関係団体、行政すべてで、課題および目標を共有し、総力で取り組みたい。



ごみブクロウの『エコな生活ホーホー』教えます!



ごみブクロウ流 「まち美化のすすめ」
ごみゼロの 日にはすすんで 日にはすすんで 日にはすすんで 日にはすすんで
ごみ拾い みんなでつくる きれいなまちを きれいなまちを きれいなまちを

5月30日は「5(ご)3(み)0(ゼロ)」の日。美化活動の記念日だよ！ 道端に落ちてごみをひとつ拾うだけでも、きれいなまちをつくる大きな一歩になるよ。みんなで取り組もう！
清掃活動には市がボランティア用のごみ袋を支給したりごみの回収もやってるよ。

▶詳しくは、生活環境課 (☎ 66・1005) へ。

まいづる花図鑑 81

【ニガナ】

(キク科) 見ごろ5~7月頃



道端や山野に生える多年草。茎は高さ30cm位になる。根元の葉は花柄があり、へら形で先の尖った鋸歯がまばらにある。茎の葉は柄がなく基部が茎を抱く。初夏、茎の先で枝分かれし、径1.5cm位の黄色の花をたくさん付ける。

稀に白い花も咲き、シロニガナと呼ぶ。名前の由来は「苦菜」で、茎や葉に苦味のある白い乳液を含むことから。

【協力】

瓜生勝朗 市文化財保護委員 (植物分野)

「引き揚げ」の記憶を次世代へ

引揚記念館に展示・保管している海外からの引き揚げやシベリア抑留などに関する約1万2千点の資料の中から、前回に引き続き「白樺日誌」を紹介いたします。

白樺日誌は、舞鶴市出身の瀬野修氏がシベリア抑留中に白樺の皮をノートの代わりにして、日々の思いを俳句や和歌に綴ったものです。今回は、その中から妻や子供たちを思う気持ちを詠んだものをご紹介します。

「唯独り 生きるも難き是の世に

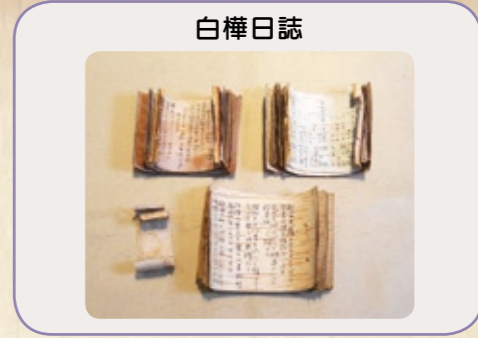
女子三人いかに過ごすや」

1人で生きていくのも難しい世の中で、女性3人でどのように暮らしているのだろうかかと祖国にいる妻や子供たちの身を案じており、続きの句では、

「帰る日の 近きを念じ只管に

汝が見守りて健けくませ」

1日も早く帰れることを願うばかりだ、お前(妻)が丈夫であることを願うばかりだ、と重ねて家族の無事を願っています。自身が過酷な状況に置かれながらも日本に残された家族がどうしているのかという思いが、生きて帰らねばという気持ちを強くして、それが生きる活力となっていたのでしょう。



また、長く厳しいシベリアの冬で雪解けを待遠しく思っていると、ふと子供たちのことを思い出して詠んだ句があります。

「雪解けを 待ちつつもとなはしけやし 子等の瞳の忘れなくに」

忘れたくとも忘れられない子供たちのことが心配になり、抱きしめたくなる衝動にかられる思いを詠んだこの句には、子供たちへの溢れんばかりの愛を感じ取ることができます。

瀬野氏はこのほかにも兄や母を思い詠んだ句もあり、極限の状況にありながらも家族の安否を気遣う気持ちが伝わってきます。家族の絆や人を思いやる気持ちは、現代の我々へのメッセージとも取れるのではないのでしょうか。

▶詳しくは、引揚記念館 (☎ 68・0836) へ。

広げよう人権の輪 ～ 家庭の中から「おはよう」「ありがとう」を～

小さな体に大きなランドセルを背負い、ピカピカの1年生が元気に登校する姿を目にされていることでしょうか。その子どもたちのかたわらに優しいまなざしで付き添って歩いておられるボランティアの皆さんの姿も目にされているではありませんか。

子どもたちの安全・安心を守ろうと各地で「見守り隊」「パトロール隊」が組織され、登下校時に交差点に立たれたり、一緒に歩かれたりと多くの方が活動をされています。あるボランティアの方は子どもたちのためにという一方で、自分たちも子どもたちに元気をもらっているから頑張れると話されています。このような互いに支え合う関係が知らず知らずの間にできていることは、私たちが生活をしていく上でとても大切なことであり、こういった見守りによって毎日、安全・安心に登下校できていることへの「ありがとう」の気持ちを子どもたちにも感じてほしいものです。

子どもは、家庭を拠点として幼稚園、小学校、中学校と少しずつ大きな社会の中に身を置くようになっていきます。泣いたり笑ったり、日々、成長していきます。その間、家庭や学校、地域などで、家

族や友達、さまざまな大人との豊かなかわり合いをとおして、人に対する愛情と信頼感を深めていくものです。その中でも大切な役割を果たすのが家庭です。「自分の大切さと共に、ほかの人の大切さを認めること」ができるために必要な人権感覚は、いくら言葉で説明しても身に付くものではありません。自分が大切にされていることを実感してこそ自分やほかの人を思いやる感覚や気持ちが芽生え、育つものです。

まずは家庭から、日常生活の中で交わす「おはよう」「ありがとう」などのあたたかい声かけや心を伝える話し方をこころがけていきませんか。

《人権啓発推進室》

